サイン帖を貼った屏風に寄せて

玉川学園女子高等部一九三九年卒
安田（平山）礼子

小原國芳先生が書かれた膨大な著書の中に
「労作教育は実に、聖育・知育・徳育・美術・生涯教育・健康教育の綜合である…」という文章がありました。「労作教育」は小原先生の教育の原典でした。六十五年前、私達は牛を飼い、羊を飼い、畠を耕し、道をつくり…と労作に励みました。「野良仕事も出来て、歌も歌えて、ピアノも弾けて…」 とおっしゃる先生の言葉を何回聞いたことでしょう。

「若いうちに沢山の本を読んでおけよ。長編は若いうちに読んどかないと、年を取ると読めなくなる。長編の傑作を読むんだな」
これも、よく聞かされたことです。哲学科出身の先生の読書力のスゴサを思うと自然なことでした

「牛の世話も出来て哲学の本も読む」つまり「反対の合一」です。「全人」です。
ところで、私達、女子高等部の学生達は、労作の時間に時折、出版部を手伝いました。印刷も殆どが生徒の作業によって成された時のことです。活版印刷の時代でしたから、文選そして、植字の仕事がありました。膨大な活字の中より字を探すことは大変な努力と注意と辛抱がいる作業です。鉛に刻まれた文字を一字づつ拾って版の大きさの木の箱に並べるのです。
また、当時学園では数冊の月刊誌を発行していましたが、女子高等部生の学生は「全人」の前身である「女性日本」の編集も労作教育の一つとして手伝っていました。そのため、時々掲載するためのインタビュー記事を取りに行きました。先生は
「一流の人に会うことだよ。それが教育なんだよ」 とおつしゃるのです。それは、そうでしょう。理想でしょう。でも、それがどんなに難しいことか。簡単なことではない筈です。でも私達は、先生の紹介状と一枚の名刺を持って、有名な方に会えることにのみ心を弾ませ、嬉々として出かけたものです。名刺には
「ムスメ達をよろしく!」
と、ひとことの添え書がしてありました。
女子学生のインタビューというのは、当時としては、あまり無いことだったからでしょうか、おそらくは、小原先生の頼みだから、ということでしたのでしょうが先生のおっしゃる一流の方々が気さくに会って話をして下さいました。
「大丈夫？ ゆっくり話そうか」と優しく言って下さる方もありました。
「ハイ。そこでマル」とまで言って下さったのは、どなただったでしょうか。私達は二人か三人で行って、話されることを懸命に書き取り、あとでお互いのノートを照らし合わせて、纏めたものです。
そして話が済むと、遠慮もなく、サイン帖を差し出すのでした。預かってきた友達の分まで並べるのを、どなたも気持ちよく書いて下さいました。
お一人お一人のサインの裏には、小原先生のさまざまな気遣いと御苦労があったこと、あちこちの伝手を求めて下さったことを知るのは、ズットあとになってから

のことでした。また、中には既に父兄であった著名な方々もいらっしゃいましたが先生の多彩な交流関係があればこそ出来たことでしょう。

それにしても、一人のサインのうらには、さぞかし、沢山の御苦心があったでしょう。と、今頃になって、しみじみと思うことです。そして、一つ一つのサインが改めて大切なものに思えてくるのです。

でも、半世紀を遙かに越えたサイン帖は、もうボロボロになってきました。このままでは私がいなくなると、散逸してしまうばかりだと思いましたので昨年六月、陶芸の個展をしました折、サインを屏風に貼ることを思い付きました。この二双の屏風に仕立てた次第です。

サインにある　近衛秀麿氏、ローゼンシュトック氏、そして山田耕筰氏の指揮で、ベートーヴェンの「第九」の合唱を国立音楽学校(現在国立音大)の方と一緒に東京交響楽団(現N響)で歌ったのは、昭和九年からでした。

当時の玉川学園は、まだ小人数であったため、参加した学生・生徒は中学二年生から最上級生に及び、選ばれた者でなく、全ての学生が参加する。この姿勢を玉川学園は貫き、音楽教育の黎明期に大きな刺激を与えたことでもありました。NHK交響楽団と共にした演奏会は約二十年続き、この間の出演回数は、八十数回に及びましたが、その後、両校で独立して行うことになり、以後、「第九」演奏は学園の伝統として恒例の行事の一つに加えられて後輩に受け継がれています。

その「第九」が、今は日本中で歌われるようになるとはユメにも思わないことでした。

「畠も耕して、歌も歌えて…」　の先生の理想の一つが第九の合唱の隆盛につながっているることを思って嬉しさ一杯です。

（今回、サインを屏風に貼った方々は、小原先生はじめ、荻原朔太郎・平塚らいてう・武者小路実篤・田河水泡・平井保・賀川豊彦・大谷藤子・滝沢修、近衛秀麿・小堀杏奴・林芙美子・ワインガルトナー・山田耕筰・伊原宇三郎・ヨーゼフ・ローゼンシュトック・西村伊作・原田実の諸氏。まだ貼りのこした方々が十余名ほどあります。当時、「第九」のソロを歌って下さいました著名な方々のものもありますが適当な方法を取って保存したいと思っております。）

幾人かの思い出

「サイン屏風」を寄贈させて頂くからには、サインを頂いた当時のことも付記するべきだと思いましたものの、六十五年前の記憶は悲しいほどにおぼろなもので、とても書けない……と諦めかけていましたら、学園の教育資料室に行けば、「女性日本」があると聞き、先日行ってきました。昭和十年からの本が保存されていて懐かしいばかりでした。すっかり忘れかけていた自分が書いた記事も確かにありました。

そして、読んでみると、現在にそのままの言葉を頂いてもまさにピッタリなのです。先人の言葉にはさすがに深いものがあります。

また、それぞれの方の略歴も書き添えましょう、と家の近くの図書館(川崎市麻生区)に出向いて幾冊かの人名簿で調べましたが、かなり詳しく掲載されている方もあり、私の知らなかったことも数多く、今更ながら、それぞれの方の偉大さに感銘を

受けています。

実は私の個展の時に屏風のサインを見ていた若い人達には署名した方の名前も知らない人が多いのに驚きました。六十五年というのは、もう昔のことなのでしょう。そして私がお目にかかって伺った言葉もサインと同様にやはり残すべきだ、と思いましたので、今回みつけた幾人かの訪問記を、少し省略しながら書き残すことにしました。

なお、私の知らなかった小原先生との、また学園との関係のさまざまを、特に音楽関係のことなどは、玉川学園女子短大元教授の藤井百合子先生(小原先生のご長女で、長年、先生の秘書として身近にいた方です)が抜群の記憶力と豊富な思いを駆使し、また詳しく調べなおして補足して下さいのました。心から感謝しています。

石井柏亭[(一八八二～一九五八)洋画家。名は満吉。東京生れ。石井鶴三の兄。浅井忠に学び、二科会創立会員として活躍したが、一九三五年、芸術院会員に選ばれ官展に復帰。平明な写実を鼓吹、水彩画や詩歌・評論もよくした]…十才の頃より　父に日本画を学び、中学中退後、浅井忠中村不折などに師事する一方日本画にも興味を持ち平福百穂の天声会会員となる。のち東京美術学校西洋画科に入学、黒田清輝・藤島武二の指導を受ける。四十年、雑誌「方寸」創刊。第一回文展に姉妹・千曲川を出品。欧州巡遊。二科会創立、「中央美術」創刊。大正十年西村伊作らと文化学院創立。安井曾太郎らと一水会結成。「評伝マネ・マチス」「欧州美術遍路」等の著作あり。…

女性日本昭和十二年九月号に「絵をかく心」という題名の文章が掲載されていました。訪問記を書くよりもこちらを紹介した方が、はるかに柏亭氏らしさが出ていると思いましたので、少し省略しながら転載させて頂くことにしました。

絵を画くということは、簡単に云えば自然の美しさに感じて、それを表そうとすることである。それには、いろんな方向がある。どの方向から見ても、自然の美を感ずる天分を幾らか持った人でなければ、その方に向かない。之(これ)は人によって敏感鈍感の差があるが、美術に向う人は多少敏感であることが必要である。

自然の姿をそのまま写しとって美しい絵にするという行き方と、自然の中から線・形・色とかの組み合わせをぬいてきて多少抽象的に表す方向と両方がある。

自然というものは誰でも眺めているが、その眺め方に深い浅い、と色々ある。絵を画くことによって自然の美しさというものが段々深く分かるようになる。絵を画いている人でも随分見方の浅い人がいるが、段々やっている中に分かってくるものである。

之は、絵を画くものが人間の生活を豊富なものにすることが出来る所以であろうと思う。だから専門にやらないでも少しでも絵を画く事が出来れば自然の美しさが分かる。それで私は一般の人にも絵を書くことを希望するのである。

歴史を見ても、写実主義というのが折々おこっているが、それは大抵は主義としてやり出したものではなく、自然をよく見直して、その美しさに感じた結果、有りの儘に表そうということになったのである。

だから初めから主義として出発したのではなく、どうしてもそうしなくてはならなくなった気持ちから写実主義が生まれたと私共は考えている。つまり人工を加え

たりするよりも自然そのものの方が、即ち人間の小さな頭で工夫するよりも自然そのものに従った方が良いという考えになった次第である。

兎に角、絵に限らず何の美術でもそうであるが、最初、型が出来て、それを真似する人が非常に多くなる。型が決まるというのは名人のやったものを写していく、努力しないで人のやった型を真似していくという風であるから自然、勢いのないものになる。そして自然の教へを受けることが疎かになって、そのために作品が落ちてくるようになる。そのだらけた作品を引き締めようとして写実主義がおこってきたと私共は見ている。

昔は大抵注文によって絵は出来たのである。之は東洋・西洋同じことである。つまり、お寺の偉いお坊さん達から、また西洋ではキリスト教の法王や信者達から、信仰に関係のある物語や、その他のものを壁画に画いてくれと頼まれて画いたものである。今日、イタリー辺りの寺院に多く残っているが、又肖像画なども注文に応じて描いた。一七世紀頃からは寺院や貴族の注文ばかりでなく、一般の人々が住宅の中で鑑賞するという気分がおこってきて、小さな絵を描くようになった。そして静物・動物・風景・人物などを描いたのである。それから、こんな絵を描いておけば誰か注文するだろう、欲しい人がいるだろう、と予測して描いたのである。

然し、一九世紀になってから注文でなく、人の欲することを予想しないで描くようになった。即ち自由主義・個人主義がふえてきたのである。だから貧乏な苦しい生活をしながら絵を描いて一生暮らしてきた人もいる。

一方展覧会というものが多くなり、それよって人に見せるというものが多くなった。之も一つの自由主義である。けれども展覧会で見ただけで、後、使い道のない絵が沢山出来ている。会場芸術というものは常設館に並び得るものでなければいけないと思うが、それには優(すぐ)れたものでなければ並べられない。今日では展覧会で見せて、外に見られないという不健全な現象を呈している。

やはり絵描きが個人の住宅にも使われることも少し予想してもいいのではないだろうか。そんなことを考えるのである。

伊原宇三郎[(一八九四～一九七六)洋画家。徳島市生れ。東京美術学校卒業後、フランスに留学、帰国後無所属で帝展などに出品。母校教授、日展理事などを務める。ピカソの新古典主義の影響を受けた初期の作品は、単純な色彩で重厚か量感を見せている。]

昔の日本人は必ずしも芸術的ではなくても色々な意味でもっと人間として生き甲斐のある生活をしていただろうと想像されます。

所詮、文明というものは進んできていることは認めるが、人間的な生活というような意味から言うと、かなり惨めなものになっていると思う。物質とか地位・名誉そう言った形のものが非常に尊重され過ぎて、人間の心を主にした生活というものが殆ど踏み躙(にじ)まれている。

芸術家の立場から見ると、それらは人間の値打ちの尺度にはならない。人間の生き甲斐というものは、その人の日常生活の中に、広い意味の美の意識がどの程度まで解け込んでいるか、ということによって生き甲斐というものが決定されると思

う。その意味は自分で楽器を弾くとか、絵を画くとか専門的なことをしなくても、美というものを味わうことは出来る筈である。例えば身の回りの品物を買うにしても、服装や化粧にしても散歩の時にも、食事中だって、眼に見え、耳に聴こえてくる総ての中から美というものを探し出したり、また自分で作り出すことが出来る。そういう意識が働いた瞬間は、その人が経済的に恵まれていない生活であったとしても、その瞬間だけは、その人は人間として最高の生活をしていたことになる。私はそう言う意味での文明が日本には、まだ行き渡っていない、ということを、しみじみ感じさせられています。

私の理想からいうと、総ての人間は生きるための職業的な生活と、もう一つ職業に関係のない人間的な生活というものと、二つ持っていなければならないと思いますよ。理想的に言へば、人間的な美の生活が第一で、職業生活が第二の方便と考えられないものか……。

今の日本では食うための職業生活が殆ど全部で、生き甲斐のある心の生活というものが全く問題にされていない。医者から医者を・法律から法律を・奥さんから主婦を抜いてしまうと、人間的な味の残る人が非常に少ない。奥行きのある人間が残らなければ、本当に高等な人間、生き甲斐のある人間だとは言えない。

『十分に納得行くものの、きびしいお話でした。やさしい馬の絵にサインを添えて下さった先生に心からの感謝で一杯でした。

…昔の記事をみながら書いている時、テレビで「さすらえる戦争画」というテーマの番組で、たまたま、宇三郎氏の画かれた一枚の絵が写されました。確か香港での会談で、将校達が円卓を囲んで会談している絵で、テーブルの真ん中に数本のローソクが置かれて、そこにだけ光が集中して明暗のある、レンブラントの絵を思い出すような美しい絵でした。そして、人物の一人一人の顔に、それぞれの深い人生を描き出したような素晴らしい絵でした。これを書いていた時に偶然出会ったことに胸が熱くなりました。』

大熊文子[(一九一八～一九九四)声楽家、ソプラノ歌手。昭和十四年、東京音楽学校声楽科卒。同校の講師を勤め、昭和三十七年桐朋学園大学講師となる。NHK交響楽団東京フィルハーモニーなどのオペラ歌手として、またオラトリオのソリストとして活躍する。「歌声の秘密を解くかぎ」など著書あり。二期会名誉会員。勲四等瑞宝章授賞]

『「第九」のソプラノ歌手として歌って下さった時、サインを頂きました』

大谷藤子[(一九〇一～一九七七)小説家。三田高女卒業後、東洋大学の聴講生となる。昭和八年、高見順・円地文子らの「日暦」の同人となる。昭和九年「改造」の懸賞小説に「半生」が当選。作家生活に入る。矢田津世子、富本一枝と親交を結ぶ。戦後は「釣瓶の音」で第五回日本女流文学賞受賞。故郷の秩父に取材した「手織木綿のような」と形容された手堅い手法の作品が多い。昭和四十五年「再会」で第九回女流文学賞受賞。ほかに「山村の母たち」「風邪の声」などの著書がある]

『どのような事で学園にいらしたのか、もう思い出せないのですけど、矢田津世子さんと二人で来られました。あるいは父兄でもあった富本一枝さんに面白い学校だから行って見たら、と言われたのでしょうか…。学園の中だけでは、まだ歩き足

りない御様子でしたので足をのばして鶴川のお饅頭を食べに丘を歩いて行きました。お百姓さんの手作りの田舎風のお饅頭と手作りの漬け物が美味しく、辻も喜んで下さいました。都会風から少しずれている私達の素朴な学生生活に興味を持たれたようでした。』

矢田津世子[(一九〇七～一九四四)麹町高女卒業後二年間銀行に勤務したのち作家志し「女人芸術」に参加。「罠を飛び越える女」が「文学時代」の懸賞小説に当選。その後一時共産党シンパの疑いで拘留されたが、のち「神楽坂」により芥川賞候補となり、以来その美貌と相まって人気作家となった晩年になるにつれて、自己犠牲に主題が変わった。「茶粥の記」など十冊の著書がある。生涯独身]

大谷藤子さんと二人で学園に来られ、私たち四人で案内をした後、足をのばして鶴川まで歩いてお百姓のおばあさん手作りのお饅頭食べに行きました。都会生活から抜け出してのんびりして一日が楽しそうでした。仲の良いお二人でしたが、この翌年でしたか矢田さんは亡くなられました。女性日本で「私の考える理想の男性」として一言書いて頂きたいと御願いしたアンケートに

「登山家、ウインパー氏のような男性を理想といたします。山に対するあの真摯、努力、熱情を尊敬していますから」と書いて下さったのが残っていました。

賀川豊彦[一八八八～一九六〇) 伝道者。日本基督教団宣教師。徳島中学在学中に宣教師ローガン・マイヤーズに出会って受洗。明治学院神学部予科を卒業後、神戸神学校に転じ自分も葺合の貧民窟に住み伝道を開始する。渡米してプリンストン神学校に学び、帰国後は再び貧民窟に戻り、伝道につとめた。労働争議の指導をし、日本の労働運動の先駆者的役割をする。関東大震災の時、セツルメント事業を起こして罹災者の救助にあたり、各地の社会事業に尽くす。一時、反戦論を問われ、留置されたが、戦後、社会党結成にも乗り出した。キリストへの徹底的献身の生活をつづけ、入手する収益は惜しみなく教会と伝道者に捧げ尽くした。「死線をこえて」「一粒の麦」「貧民心理の研究」などの著書、また翻訳書もある]

『当時は日本におけるキリスト教のもっとも輝かしい時代で、後に同志社大学総長になった海老名弾正、無教会主義を唱えた内村鑑三などと並ぶキリスト者。小原先生とは旧知の間柄で、お互いに精神的に支え合われました。』

兼常清佐[(一八八五～一九五七)音楽評論家。京都大学哲学科卒。文学博士。音楽美学、音響心理学の研究。特異の評論活動で有名。著書「日本の言葉と歌と構造」等]

誰が考えても一番理窟にあった話は、音楽を聞きたいと思えば、音楽会に行って聞きたいだけ聞き、聞きたくなくなったら誰にも遠慮することなく、さっさと切り上げて帰ってくることです。

私共は少し音に馴れると、音を聞くことが愉快なことで、気が休まり頭が爽やかになります。また音楽会の空気というものは、一種の社交的温かみを覚えさせるものです。

音楽会の廊下で友人達と煙草をふかしながら、ベートーヴェンの音楽は壮大なものですなあ！と言う、たわいも無い会話も楽しいです。

また、ベートーヴェンだと思って聞いたものが、ワーグナーであろうとスクリャービン(ロシアの作曲家)だと思って聞いていたらモーツァルトであったり、でも、そんなことは構わないと思っています。

それが私共の生活に愉快を与え、快感をそそるのが誠に結構なことなのです。音楽をそのように享楽してはならない筈はありません。

また名人というのを舞台の上で見るのも、誠に愉快なものです。舞台の上での有名な人の演奏を聞いただけでも、自分の友達にでもなったような一種の快感が湧いてきます。

多少、音楽の心得があるならば、名人の芸を批評して見るのも一興であります。どうせ音楽というものは、その場きりで消えてしまうので、あとに証拠が残りません。しかし、あの名人は和弦が間違っていた、とか、この名人は音程が悪かったとか言ってみるのも一興かもしれません。そんなことを言って諸君が自分を偉そうに思って、一種の快感を味わえるなら、それも悪いとは言われないかも知れませんが、名人の価値は決まっています。諸君がいくら讃めようが、腐そうが、そんなことは名人にとっては一向に痛痒を感じないことです。

私は誰に何と言われても、面白くもなく愉快でもなく、退屈なだけの音楽を我慢して聞いていようとは思いませんが、それを聞いて私の心が慰み、私の心が楽しくなり、この生活が愉快になるものなら、音楽はかなり素晴らしいものだと言わなければなりません。

私共の生活はほとんど苦しいことに満ちています。疲弊しています。困憊しています。音楽が少しでも、暫くでも、その苦しい生活から私共を救って、耳を楽しませ、心を愉快にしてくれることが出来るなら、音楽はそれだけでも有難いものではありませんか。

例えば、モーツアルトのG短調や、C長調のシンフォニーの中の節の美しい所を蓄音器にでもかけて、コーヒーを飲みながら聞いているのは甚だ愉快なことです。

またドボルザークの「新世界シンフォニー」。殊にその第二章。スメタナのシンフォニー「祖国」。チャイコフスキーの第六シンフォニーなど。ただメロディの綺麗さ、面白さを賞賛して楽しむこしも出来ます。

これもまた一種の音楽の聞き方です。

管弦楽ほど色彩が豊富ではありませんが独奏のものも相当面白いです。

ピアノではモーツアルトのソナタ、音が明瞭で澄んでいて、節が面白くて、中々気持ちのよいものです。長すぎて退屈だと言うなら、シューベルトの曲、ショパンのも、この目的に適しているでしょう。

雨だれの音にしても、聞く人の心一つで何とでも聞かれます。ただ、雨だれの音耳にも入らない位のものです。それが普通でしょう。

でも、人によっては、その雨だれの音から色々のことを聯想するでしょう。

「涓滴石を穿つ」という教訓話を考える人もあるでしょう。また、その静かな単調な音から、一種の沈静な感情を感じ人生の儚さを思ったり、また天地の悠久なことに考え及ぼすことも出来るでしょう。ベートーヴェンのシンフォニーを聞いて人間

の運命を考え、シュトラウスを聞いてニーチェの哲学を考えるというようなこともあるでしょう。

君達が若しこのような音楽を聞こうと思うなら、おそらくベートーヴェンはその代表的なものでしょう。彼には他の音楽家に見られない多くの波乱があり、それは私共に人生の記録として非常に興味を与えます。瞑想や思索の種とするに充分なものです。

彼の音楽は全く素晴らしいものだと言って不穏当ではないと思います。私共が彼の第五シンフォニーを聞きながら、その音楽の美しい音、美しい節を耳で楽しむと共に、心ではベートーヴェンの生涯を考え、人間の運命を考えるならば、その時の私共の心の状態は非常に複雑な、非常に高級なものと言われるでしょう。

ベートーヴェン以後になると、この傾向はだんだん強くなってきます。作曲家は文学的になり、瞑想的になり、音楽の中に多くの内容を含ませようとします。例えばマーラーの第八シンフォニー。「ファウスト」の第二部の神秘に満ちた場面を考えるというようなことは、ベートーヴェンの音楽などでは到底出来ないことであります。

ところで、諸君が音楽を聞いて、どうも音楽は面白くないと思うならば、それも君達の生活から来る事実で、誰に媚びて、この事実をまげるにも及びません。スポーツなりに走ればいいことです。

『兼常先生にお目に掛かる…と話していると、エ？　あの先生変わり者よ。　こわいよ。と言った助言を下さった方がありましたが、私には真実まっとうなことを話して下さった素敵な先生に思えるのでした。そうだとそうだ、と頷いて聞きながら、ちっとも怖くないじゃの、と思ったことを思い出しました』

小西重直［（一八七五～一九四八）教育学者。文学博士。東京大学哲学科卒業後、ドイツ留学で教授学を研究。帰国後、広島高等師範学校教授。大正二年、京都大学文学部教授。昭和二年文学部長成城学園総長。昭和八年京大総長。のち私立千葉工業大学総長。著書「学校教育」「最新女子教育学」］

近江聖人と言われた中江藤樹先生の書かれた書物に「翁問答」というのがあります。その中に先生の宇宙観、人生観というものが出ております。それは「愛と敬」の二字にあらわれています。愛と敬の心を持って人に触れ、物に接する時、そこには色々の徳が出てきます。

友人に対しては信義となり、或いは幼児を慈しむ慈愛の心となり、天に対する愛と敬、それは順であり、和であります。人間各種の方面に対して、その名は異なるが、みな愛と敬の態度であると思います。

度々学園を訪ねてこられました。短時間の講話を何度か伺いました。その中の一つです。

近衛秀麿［（一八九八～一九七三）指揮者・作曲者。文麿の弟。東京生れ。東大中退。一九二五年以来半世紀にわたり、山田耕筰らと共に日本の交響楽団を育成。作「ちんちん千鳥」など。］

『玉川主催の「第九」演奏会では、学生達は合唱指導を受け、オーケストラの指揮も

度々して頂きました。玉川学園創立三十年の折りには集大成として記念行事や、学会が開催され、その中の一つとして、都心のホールで「第九」演奏会がありました。気品ある指揮に和して合唱は盛り上がりました。この時、近衛氏は校歌を管弦楽用に編曲し、彼の指揮で初演披露し、芸術教育が開花しつつある感をうけたコンサートでありました。』

小堀　杏奴[(一九〇九～一九九八)小説家、随筆家。森鴎外の次女。姉に森茉莉さん昭和十二年「晩年の父」を刊行して評判になった。以後も「森鴎外 妻への手紙」「回想」などを刊行して鴎外研究の新資料となる。戦後は「冬の花束」「日々の思い」「春のかざり」などの作品を発表。洋画家小堀四郎氏と結婚。

『お訪ねした時、膝の上に可愛いお嬢ちゃまがいらして、その手をサイン帖にのせて手形をたどり、その上にサインをして下さいました。

父森鴎外に「パパっ子アンヌ子」とよく言われていた。と優しい大作家の一面を話される時、嬉しそうでした』

田河水泡[(一八九九～一九八九)　漫画家。本名、高見沢仲太郎。東京生れ。日本美術学校図案科卒。抽象画家、版画家、落語作家を経て漫画家に。一九三一年、少年倶楽部に連載漫画「のらくろ」が人気を博す。十年近く子供達の圧倒的な人気を集めた、「蛸の八ちゃん」「スタコラサッちゃん」など。軍の圧力があり筆を折る。一八八六年、銅版画の個展。著書「滑稽の研究」「滑稽の構造」等。門下に滝田ゆう・長谷川町子等輩出。日本漫画家協会名誉会員。勲四等旭日章綬賞]

『当時「のらくろ」を知らない人はなかったでしょう。子供も大人も新しい本が出るのを待ちかねたものです。あの「のらくろ」が生まれるには水泡氏の深い子供への思いがあったことを、ご本人に会って改めて知らされました。』

漫画というものは範囲の広いものですが、僕はその中の児童漫画をやっています。子供に向かって描いているから、何時でも子供ということを念頭において描いています。それぞれの雑誌の方針に、はまるように描くわけですが、先ず雑誌よりも子供を中心にしています。

その他、漫画には自然を観察するとか、風刺を主として描いた風刺漫画等もありますが、私はそんなことを考えるより、先ず子供を理解することが第一だと思っています。理解するということ、理解して子供を操縦して行くことが上手だと言われることもありますが、之は、とかく誤られ勝ちである。だから、もっといいということは、子供は大事なものと尊敬して描き始めると一番よいものが出来るのです。

そして、子供に見せてならない構図・事柄、聞かし、覚えさせてならない言葉、見せてならない大人の世界、之は考えようによっては、大人の世界をのぞかして世間を解らせるという人もあるが、それはかえって子供に恐怖・不安の念を起こさせることになると思います。

子供には物を覚える順序というものがある。智的教育は学校がやっている、で学校では非常に細心に順々に覚えさせようとしているのに、漫画家がそれを無視して時に離れたことを教えるのは非常に悪いことである。それは教育者も悪いが、第一

子供に非常に悪く、いい影響は与えないことですから、そんなことに注意をはらっています。

そんな考えが第一に先で、絵を上手に描こうとか、自分の作品から元気を感じさせようとか、そんなことは考えないでもよいことなのです。勿論、漫画が一つの絵の形式をとっているから、絵には違いないのだから、ますます上手に描くことは必要でしょうが、それより先に児童漫画家は子供を理解し、尊敬する態度から入って行かねばならないと思います。

『後年、玉川学園住宅地に住まわれ、自然を愛されました。夫人高見澤潤子さんには、学園の礼拝で毎年、講話をして頂き特に「兄、小林秀雄の生き方」の講話に学生達は深い感銘を受けました。玉川大学出版部より多数の著書を出版しておられます。』

玉錦三右衛門（たまにしきさんえもん）「（一九〇三～一九三八）本名西内弥寿喜。高知県出身。大正七年、十五才で二所ケ関部屋に入門。生来の負けん気と、血の出るような稽古で生傷が絶えず、「ボロ錦」と言われたこともあったが、初場所以来六年目に十両、翌年入幕、昭和八年に第三十二代横綱。土俵入りは、しこ名の通り錦絵のようだったと言われた。十三年、盲腸炎をこじらせて現役のまま三十五才の命を散らす。親分肌で、小部屋を一代で大部屋にし、その烈しい稽古は今も二所ケ関部屋の伝統となっている。右四つからの寄りを得意とし、出足の早さも抜群。優勝九回」

永田さんと二人で訪問することになった。玉錦訪問！　天下の横綱である。嬉しい半面、相撲の知識にうといので少々心配。

煙草屋の横を右へそれると大きな門構えの家がすぐ目についた。「二所ケ関事玉錦三右衛門」の標札が掛かっている。大きなお玄関、大きな標札、それから大きな弟子達…すっかり圧倒されてしまう。

玄関で案内を乞うと「玉錦」と背中に染め抜いた印半纏のお爺さんが出てきた。訳を言って上がらせて貰うと、「今、両国へ行ってますから、マア中に入って待って下さい」と座布団を出してくれる。

入ると直ぐの所に土俵が作ってあって綺麗に砂が掃き清められていた。その廻りで弟子達がさまざまな形で稽古をしている。近くにいた人に昭和十年に玉錦関は、学園の土俵開きの時、男女（みな）の川、玉の海、鏡岩など四十人もの力士を連れて来て下さったことなどを話しかけていると、お玄関が騒がしくなり、大きな體をゆすって横綱が帰って来たものの私達が、ちょこなんと座っているのには気がつかないらしく、そのまま、ふかふかの蒲団（ふとん）を三枚も重ねてあるその上にドシリと横になってしまった。

この形で質問するのかしら…と戸惑っていると、おかみさんが、「早くしないと眠ってしまいますよ。玉川学園からいらして訪問記を書きたいんですって」と助け船を出して下さる。

「一日を、どんな生活を…」

「別に何でもないよ、朝起きて顔を洗って、御飯を食べて、午前中、稽古をして、風呂に入り、用のある時は用事をする。それだけさ…もうこれでいいんだろう？」

「いえ、もう少し…」これだけでは訪問記になりはしない。と慌てていると、「もう眠いよ」と大きな足を組みかえて本当に眠りそう。

そして、「あんた方のお郷里(くに)は何処？」「九州です」
「九州と言っても広うございます」「福岡県の小倉です」
「年は幾つ？ 学校は何年？」と逆襲である。でも横綱が時に見せる子供のような表情が、こちらの気持ちを楽にさせてくれた。
「今度はこちらが聞きますよ。お相撲の他に、なにかスポーツは？」
「玉をやる。玉は十二年で二〇…、まだか、もういいだろう」
「どんな食べ物がお好きですか？」
「おいしく、、あっさりして成分のあるもの…、もう眠いよ」
「何か、娯楽方面の趣味は？」
「浪花節、チャンバラ映画も、たまには見る」
「苦心談を一つ…、」
「そんなものはないよ。もう睡(ねむ)いよ」
もう無理だ。それではお疲れの所を…、と引き下がろうとしたが、折角サイン帖持って来たのだから、とサイン帖を出したら、おかみさんが、「サインをして欲しいんですって」と、またも助太刀。
「サインか？ 無学だから書けないよ」とおっしゃるのに、「何でもよろしゅうございますから」 とねばると、
「イヤーヨ！」とわざと黄色い女の声色(こわいろ)を出して向こうをむいてしまう。
もう止めましょう、とサイン帖を引っ込めかけた時、一人の新米らしいお角力さんが横を通りかかったら、いきなり
「お前書いてやれよ」 若い新弟子らしいその人は、「弱ったなあ」 と頭をかきかき 「神風正五郎」 と書いてくれた。見ていて気が変わったのか、「あたり石を持って来てくれ」 と横綱。そして持って来た硯に墨をあてて、先刻から鳴っているレコードの浪花節に調子をあわせて刷り始めた。
大分 使ったらしい小ちゃな墨は大きな手の中で一層小さく見える。眠気がとんだのか嬉しそうな優しげな顔になる玉錦関、立派な堂々とした字で「玉錦」と書いて頂けた。
色々有難うございました、と心よりのお礼を言って辞した次第。
玉錦、本当に力士らしい。体は堂々としているが、何処か子供っぽい。改めて次の場所の横綱を見乍ら、一点非の打ち所ない横綱の品格を備えていることに感動した。

神風正五郎(一九二一～一九九〇)本名赤沢正一。昭和三十七年二所ノ関部屋から初土俵。たまたま、朝日新聞の「亜欧連絡大飛行、神風号」が飛んだ時で、それにちなんで「神風」の四股名をつける。凛々しい風貌と華麗な上手投げで人気がある。ＮＨＫ放送文化賞を受けている。

玉錦訪問より サインか？ 無学だから書けないよ」と仰っしゃるのに、「何でもよろしゅうございますから」 とねばると、「イヤーヨ！」とわざと黄色い女の声色(こわいろ)を出して向こうをむいてしまう。もう止めましょう、とサイン帖を引っ込めかけた時、一人の新米らしいお角力さんが横を通りかかったら、いきなり 「お前書い

てやれよ」若い新弟子らしいその人は、「弱ったなあ」と頭をかきかき「神風正五郎」と書いてくれた。見ていて気が変わったのか、「あたり石を持って来てくれ」と横綱そして持って来た硯に墨をあてて、先刻から鳴っているレコードの浪花節に調子をあわせて刷り始めた』

ところで、「神風正五郎」始めて聞く力士の名だったが、その時入門したばかりだと後で知った。とにかく応援しましょう、と皆で取り組みを楽しみにしていたら何とトントン拍子の出世、関脇まで進んだが昭和五十年に引退してNHK相撲解説者として活躍した。これは神風正一の最初のサインの筈である。…後に時折私達のお喋りの話題になり、サイン帖を持って会いに行って見ようか…でも実現に至らなかったことが残念です。

滝沢修[(一九〇六～二〇〇〇)新劇俳優。東京生れ。本名脩。一九二五年築地小劇場に入り、次いで左翼劇場、新協劇団に参加、「夜明け前」「火山灰地」などにおけるリアルな演技で中心的俳優となった。戦後は久保栄らと東京芸術劇場を創立、さらに宇野重吉らと民衆芸術劇場(民芸)を結成し、「炎の人」「セールスマンの死」などで名演技を示した。放送・映画にも活躍。]

茅野雅子[(一八八〇～一九四六) 明治・大正時代の歌人。大阪生まれ。茅野蕭々(しょうしょう)の妻。山川登美子と並び、明星派三大才媛といわれた。清楚な歌風。歌集「恋衣」「金沙集」のほか、童話・小説などがある。日本女子大教授]

中桐確太郎[(一八七一～一九四四)教育家。福島市生。東京専門学校(現早大)文学科卒。大西祝(はじめ)、坪内逍遥等に学ぶ。早大教授。論理学・教育史・倫理学・英語等を講義。後進の指導に熱心であった。主著「論理学綱」(撰)「光明祈願にそへて」(撰)等]

「人間のもっている根本の要求は何であるか」ということを考えて見ましょうか…誰でも生存欲、生きたいという欲望。ショーペンハウアーの哲学もそれによって成り立っていますが、限りなく生きていたい。という、ただそれだけでは何の意味もありません。

神は二つの道を選ばせて下さった。限りなく生きていてもよい。然し生きている間は何の自由も与えない。という道と、一切の自由を与える。然し命は短い。という道と。しかし人間にとって自由が全くない生活は意味がありません。短くとも自由をエンジョイする生活が望ましいのです。

『優しい穏やかな声で諄々と説いて下さる先生、筆記する手も、ともすれば休めて、じっと聞いていることになりそうです』

鋳掛屋まつ、というお話を知ってますか？　ある日、一人の鋳掛屋が両国橋の上を道具をかついで通っていると橋の下で船を浮かべてドンチャン騒ぎをしているのに気がついた。そして自分のしがない生涯を顧(かえり)みてつまらなくなって、よし、河岸を変えてみよう、ってことで、道具を河へ投げ捨て、太く短く世を送った。というのです。無理もないことだと思います。

しかし、自由の意味は、一切の束縛を受けないようにするということではありません。天賦の性能を活動させるのが本当の自由です。」

人間は、人の情けの中に愛の中に住まってないと本当の欲求はみたされません。生存欲の奥に自由の欲求がありますね。それは社会性を仮定しています。言い換えれば、社会性は　縦から見れば自由、横から見れば愛です。愛なくして、自由の要求は満たされません。不完全なる愛の中に、不自由なる自由を満足させるのが社会です。

『すっかりお話に引き込まれて、みんなの筆記する手が止まると、大丈夫？と、手の動きをうながすように、みんなの顔を見て、更に続けられます。静かな四畳半のお部屋に深みのある先生のお声が、みんなの心にしみてゆくのでした。』

一番力強く自由と愛を保証してくれるものは、国家です。つまり国家本位の社会だと言うことが出来ます。そして国に属さない人はありません。ですから属している国がよくなければ学校も家庭も殆ど役に立ちません。属している国に全力を注ぐということ、全力を注いで愛するという気持ちは誰でも持っています。戦争の原因にも、色々ありますけど、この国家を愛するという気持ちも戦争の一つの原因だと思います。

私は愛の定義をこう下しています。愛とは自分と他の者、自他が本来一つだと自覚した時に起こってくる心の作用。自他一体の霊的経験を基礎とする心的作用です。人間とは何ぞや、というと、人間を心と体に分けて説明する習慣がありますが、「心身一如」というのが事実だと思います。だから私は人間を説明するのに三つにわけます。身体・心・霊と。心と体は誰にでも分かるが、説明出来ないものがあります。信仰です。一文無知の尼入道が持っている信仰は迷信ではありません。却って牧師などは知識で作り上げた神を持っています。有島武郎さんなど、その為に苦しんだのですけど。兎に角、信仰というものは霊的に直観したものでないとなりません。そういう自他一如の境地は智では分かりません。しかし、それを悟る力が人間にはあるのです。愛というものも、こういうものでなければいけません。

『そしてなお、愛の説明をするには定義の説明だけでも三時間位はかかりますよ。しかし、今日はこれ位で先に進みましょう。とご自分ではもっとつとも話したい。話して分からせたい。というお気持ちがよく分かり、有難いことでした。』

地方に行っていて同国人に逢うと非常に懐かしいものです。利害を異にしていても同国人であるために懐かしい。隣人とは或る一定の空間を同じゆうして存する人ですが、空間が同じと言うだけで愛が出てくる。何かの点で同一だと分かる時に愛が出てくるのです。愛の根本は、萬有本来一体であるという事実にあると思います。それを具体的に表したいという気持ちが人間にはあります。青年等が、ネームレスストレスという焦燥煩悶の元はそこにあります。

国が同じ、という知的の刺激により万有の本来に気付き始めてくる。根本の愛は、そこにあるのです。

国家の愛の根本は、「萬有一体」ということにある。国だけを愛し、根本である萬有一体の愛を忘れることは危ないことです。

健全なる愛国心の基礎は、広き愛、宇宙愛、人類愛にあると思いますよ。

婦人達にしても戦争中も戦後も、これを根本にして考えたいと思います。万有一

体の人類愛を養成するのが婦人の為すべきことだと思います。

『はっきりと 結論で結ばれました。よいお話に心から御礼を言って失礼しようとすると、まあお茶でもと、おすすめ頂き、面白いものをお見せしましょう。と、国木田独歩の手紙を出してきて見せて下さいました。思いがけないもの、思わず嘆声をもらしていると、独歩が信子さんがいなくなって、淋しがってる頃、私にくれた手紙です。国木田独歩のものは皆さんの間でも読まれますか。「欺かざるの記」に私のことがでているようです。ありし日の独歩と先生の深い友情が偲ばれることでした。

中桐先生は早稲田大学の倫理学の教授です。丁度、お子さんが小原先生の牛込時代のお弟子さんなので、親切にして頂けて嬉しいことでした。さすが倫理学の大家、優しい静かな中に、何か犯し難い深い深いものをお持ちになっている先生でした』

中西悟堂[(一八九五～一九八四)野鳥研究家・歌人・随筆家金沢市生れ。天台宗学林卒。僧職から転じて野鳥研究に没頭し、「山岳詩集」「野鳥と共に」などの詩や随筆・書き、一九三四年柳田国男・北原白秋らをさそって「日本野鳥の会」を創設。他に詩集「東京市」歌集「安達太良」などがある。悟堂は法名。金沢市生れ。一九三四年日本野鳥 の会を創立し、自然保護に尽力。著「定本野鳥記」など。

西村伊作[(一八八四～一九六三)教育家・学者。父は大石与平(クリスチャン)一八九一年・濃尾大地震で父母を失い、母方の養子となる。叔父の影響で平民社活動に参加。一九二一年、与謝野鉄幹晶子夫妻、石井柏亭等と文化学院(自由・芸術を尊重・男女平等など)を創立、校長に。著書に「生活を芸術として」「我子の教育など」]

小原先生を訪ねて来られた後、私達数人で学園内御案内した時、食堂で一休みした折りのことです。目の前の私達をスケッチし、サインして下さったものです。ダンディな方という印象が残っています。また、「自分の学院の生徒達は鉛筆が落ちていても見ながら拾おうとしないあなた方は、そんなことありませんよね」と言われたことを案外なことを仰っしゃるものだ、と思ったので、今もはっきり思い出します。千代田区にある文化学院と、田舎に建てられた玉川学園の生徒達を比べていらしたのでしょうか。女性日本の為に御願いして書いて頂いたものを省略して書かせて頂きます。

人間は、生まれて歩いたり、泳いだり、自動車・自転車を使わなければならないと同様に、絵を画く力がなければいけない。機械の考案でも、建築・衣服でも、全部絵をかく技術が基である。絵の力によって人間の文明は非常に進歩している。

絵というものを不生産な遊びの様に考え、虚栄的に感じている人が多く、絵の力が非常に生活に必要と考える人が少ない。設計・図案に絵の必要なことは勿論だが、そればかりでなくホントの自然の美を理解する事が大事である。

人が何のために生きているか、その目的を答えることは難しいが、この世をよく見て、経験によって、最後によく理解することが目的だと思います。と言っても大した間違いではないと思う。(この先は「女性日本」のコピーがありませんでしたので)

萩原朔太郎[(一八八六～一九四二)詩人。群馬県生れ口語自由詩を芸術的に完成して新風を樹立。詩集「月に吠える」「青猫」「氷島」、詩論集「新しき欲情」「虚妄の正義」など]

当時の若者には憧憬の的でした。世田谷のお住まいの小じんまりした応接室でお

待ちしていると長身で端正な顔をした詩人が入ってらして、
「やあ、お待たせしました…寒くないですか」とガスストーブの炎を大きくして下さると、緊張に身をかたくしていた私達も、ほっとして気がゆるむのだした。
「何を話せばいいのですか、質問をして下さい」
と言われて、ちょっと戸惑(とまど)っていると、ご自分の方から話し出されたので、また、ほっとしました。
「文学には二つの種類があります。一つは自分の考え、思想を述べるもの、エッセイや論文です。も一つは自分の感じ、情緒を述べるもので、それが詩歌です。
詩というものは文学の中で最も原始的なもので、世界の何処の国に行っても詩は文学が生まれる前に発生している。詩は人間のセンチメントを素直に表現するものであるから文学の中で一番素朴で原始的である。と言っても低級だとか幼稚だと言うことはない。心の調子が高い感動を持った時に詩を作りたくなる。
後世、人智が発達してきて感動をおさえて理性によって行動しなければならなくなって、散文が発達したが、詩でなければ現せないものがあるから詩は亡びない。感性感動を述べる叙情詩は亡びることがないのです。
日本人は直覚的に、また本能的に詩というものを知っている国民だと思う。と言っても、その時の感情だけで詩は作れるものではない。より深い知性が無いと駄目です。次に表現ということを話してみましょうか。
表現がないと芸術存在しない。表現の本当の芸術は対象の思想ということ。自然の対象をはっきり認識することによる。芸術はすべて感情だけでは創れない。より深い智性がなければならないのです。
『一時間近くでした。詩とは距離のありそうな私達学生に向かって、少しでも理解させようと思われたのでしょうか、度々念を押すように微笑を浮かべながら話して下さったことを今になって思い出しています。「虚妄の正義」の作者は優しく親しみやすい方でした。そして緑がかった濃紺の和服、紬だったでしょうか、長身の詩人にぴったりで、「何と美しい！」と感嘆したことは、今もはっきりと覚えています』

畑中良輔（一九二二～二〇〇一）声楽家。音楽評論家。東京芸術大学声楽科卒。藤原歌劇団に入り、オペラ歌手として活躍する他、ソリストとしても名をなす。東京芸大・国立音大教授として日本の音楽教育に力を入れる。「歌唱の新しい指導」などの著書もある。現役の演奏家としての立場から鋭い音楽評論をして多彩に活動する。二期会常任理事、芸大名誉教授、紫綬褒章受章。
『「第九」のソリストとして歌って下さいました。』

林芙美子[（一九〇四～一九五一）　小説家。下関市生れ。苦学して尾道高女卒。自伝的作品「放浪記」で名を成し、抒情と哀愁をたたえた多くの作、清貧の書・晩菊・浮雲など発表。]
『活気のある方という印象でしたが、帰りはエレベーターまで送って下さる優しい方でした。本年は林芙美子の生誕百年に当たり各地で展覧会などが催されています。縁がありました地、鹿児島の桜島に「花の命は短くて、苦しきことのみ多かりき」の碑が建立されていますが、彼女の過ごしたどん底生活に想

いをはせました』

平塚らいてう〔（一八八六～一九七一）女性解放運動家。本名、明（はる）。東京生れ。日本女子大卒。在学中より哲学書・宗教書を読みあさり、禅の修行もした。明治四十一年、森田草平との交際深まり塩原温泉に逃避行。それは後に森田の小説「煤煙」で有名となった。同四十四年、青鞜社を起こし、雑誌「青鞜」を発刊。「新しい女」と世間の話題となった。大正三年、奥村博史と共同生活。「青鞜」の発行権を伊藤野枝にゆずる。市川房枝と新婦人協会を創立したが健康を害して引退。第二次大戦後は平和運動を志し、市川房枝と再軍備反対婦人委員会を結成。日本婦人団体連盟会長になる。「元始、女性は太陽であった」と自伝に書いた言葉は有名。〕

「教育・保健・衛生と言うような方面の言葉は今迄の政治家には等閑視されていました。女性の政治参与を久しい前から要求してきた私は、女の心が政治に加わっていれば、こに方面の施設がもっと早く進められていたことと考えます。この度、徴兵検査で壮丁検査の体位低下が問題となり、国民の保健に目をむけられるようになった次第ですが、体位の低下などという問題は、民族の将来に生きる女性が、まず声を上げなければならないことです。

別のことになりますけどね……私は学生時代知識欲や信仰心に燃えていて、校内の図書館に籠もって教典や哲学書・文学書に浸りきって、時のたつのも忘れて過ごしたものです。あの緊張した高揚した清浄な快感は、いまでも恋しく思い出します。それ故に今の自分がある。その頃が今の自分の基礎工事に成っていると思っています。

近頃の女学生は読書に対する純粋な興味というものは遙かに減退しているのではないかと思います。受験準備か、または娯楽としてのたわいの無いものしか読まない…。

今、レビュー熱というものが流行ってますね。明治・大正の女学生は恋愛小説を読む叱られたものです。紅葉・鏡花・蘆花あたりの小説に夢中になった方がどれほど人間生活を知り、人情を理解する上に得るところがあったか知れないのに……。そしたらレビューなんて、吹けば飛ぶようなものから離れて、もっと健康なものへ、わけても静かに読書し、深く考える、という方向へ導く必要はないでしょうか、女子学生が明朗で生き生きしているのは喜ばしいことではありますが、その半面、どうも上っすべりで、薄っぺらで、空っぽで頼りない感じがするのは私だけでしょうか、学生時代に良書を読破しておくことです。それは潜在意識という底のない倉庫の中に一生の間、無限に役立つために納めておくものなのです。

今私は読みたい本より、急いで書かねばならないものが先になって、本は積み上げてあるばかりですけど……。どうぞ、今の内に良い本を読んで下さいね。」

『お目にかかった時、うつむいて小さな声で話され、女性解放の運動家のイメージからは全く考えられない静かで上品な方でした。小原教育に賛同し、いち早く砧村（現成城）の開拓時代に移住された。夫君の奥村博史氏は小原先生の成城学園時代に芸術教育に参画されて、美術の教師として勤められました。長女の曙生（あけみ）さんは成城学園から玉川学園で学ばれました。女学部昭和九年卒です。』

武者小路実篤〔（一八八五～一九七六）　作家。東京生れ。東大中退。志賀直哉らと雑誌「白樺」を創

刊。大正七年、調和的共同体の理想を実現すべく、「新しき村」の運動に着手。絵もよくし、人生肯定・人間信頼を唱えた。作「お目出たき人」「その妹」「人間万歳」「愛欲」「真理先生」など。文化勲章受賞・芸術院会員〕

自分には十七才七才五才と三人の女の子がいます。まだ、女と言っても子供で女らしくなっていない。教育の方は小原教育にまかせてあるが、まあ、自分の子供の教育について考えていることを話しましょうか、

これからは女は、女ということは忘れて育てて、それで自然に女になるのが良いのではないかと思っています。女だ、女だと型通りに育てた所が、時代の方が進みすぎて、本当の女に成れずにいることだってあるように思う。僕は、自然に具わった良いところをがっしりと育ててゆきたいと思っている。先ず、よき人間であることを望み、それから、良き女であることを望み、それから、よき結婚をして、よき子供を産み、よき妻でありながら、よき人間であり、幸福な一生を送ってくれることを望んでいます。

独身で過ごしたければ、それでも良いが、それには、それだけの償い(つぐない)になる仕事をすることを望んでいます。

丈夫に育てるのが親のつとめで、あとは子供にまかせたい。自分で好きなことをさせたいが、不真面目や怠け者にはさせたくない。僕は苦労するより、喜びの方が人間を素直に生長させるものと思っているが、苦労に負けるような弱虫にはしたくないですね。負けても、つまりは勝つようにしたい。

結婚についても、やかましく言わないつもりだが、ただ騙(だま)されることを恐れる。相手の正体を見抜けるようにしたい。自分が尊敬できる人間が出てきたら結婚さしたくなるかも知れないが、しかし、愛しなければ、それ迄である。

僕が子供の結婚に対して心配するのは、まだ、早過ぎることだが、当人に任せたい。その代(か)わり当人が何処までも責任を持たねばならないのは当然である。今の結婚は女も男も同等であることは言うまでもないことだが、女は女らしくありさえすればいいと思っている。

男の無理や我が儘は正しいこととは思わない。しかし、それも相手による、僕の娘の方が相手を崇拝しきれば相手の言うことに従順になるのは当然のことだが、僕の娘が辛抱出来ない場合は離縁しても構(かま)わないと思っている。一生不幸になる必要はない。

あまり良妻賢母式に育てたくないと思っているが、しかし、自然に良妻賢母になってくれれば当人にとって一番幸福なのではないかと思う。しかし、そう言うことは半ば以上運命の働きで、僕達に出来ることは立派な人間に育てることだ。之も当人が駄目なら仕方がない。

僕は何か専門的にやりたいことがあったら、やらしたいと思うし、何か自分の仕事を持たせたく思っている。一人前の人間としても立派に通用する人間になってもらいたいと思っている。……二十二・三からあとは万事当人に任せるより仕方がないが、それ迄は親の責任として教育だけは十分にさしたく思っている。

尤も、教育と言っても学校教育だけをさすのではない。自分で自分を教育出来る

ようになることを望んでいる。学校の教育さえ済めば、それで教育は終わったのだと思う人があれば大いなる間違いと思う。学校教育が終わった所から本当の学問が始まるのだと思っている。大学を出たって、それだけでは何にもなりはしない。基礎がやっと出来たにすぎない。

学校はその人の素質や趣味や、どう言う方向に進んだらよいかを知らしてくれる所として大事な所と思う。だから学校でありとあらゆることを一通り教えて貰えることを僕は喜んでます。それに良き友を得ることが出来ることが学校の御利益だと思っています。

僕は自分の子供の性質を素直に育てることが十六・七までは何より大事なことと思っている…それからは本当に鍛えてゆくことが必要だと思うが、それは素質の問題だ。望みもないのに、勉強を強いるのは一種の拷問である。

『話をされる時、話したいことが沢山で、しゃべる言葉がそれに追いつかない感じで、かえって言葉がつかえて詰まり、よく吃(ども)られました。でも、それは話をメモする私達には少しばかりの時間の余裕が出来るので好都合でした。度々ご来園下さり、学生達に講話して下さいました。玉川学園の教育研究会にぱ数回に亘り講師陣のお一人として参加して頂き、玉川教育の良き理解者でした。』

山田耕筰[(一八八六～一九六五)作曲家・指揮者。東京生れ。東京音楽学校率。ベルリン留学。帰国後、交響曲・交響詩を発表。また、日本の交響楽団の基礎を作り、音楽界の指導者として活躍。作は楽劇「堕ちた天女」、歌劇黒船・歌曲からたちの花・この道・赤とんぼ等。文化勲章授賞]

『玉川大学出版部の前身であるイデア書院時代から引き続き「山田耕筰歌曲集」「音楽論」など多くの著書を玉川学園より出版。北原白秋氏と共に玉川教育に共鳴された方です。昭和十二年、日華事変の勃発により、次第に戦時色の濃くなって行く中で同年十二月一日に新響又は東響(現N響?)で、山田耕筰指揮の「第九」演奏会に玉川学園が合唱で出演、この時、初めて日本語による(堀内敬三訳)が歌われました』

ヨーゼフ・ローゼンストック[(一八九五～一〇九五)ポーランド生まれのアメリカ　の指揮者。ウイーン音楽院に学ぶ。ドイツ各地の歌劇場で指揮した後、一九三六(昭和十二年)来日。新交響楽団(現N響)の育成にあたり、第二次大戦後もアメリカから再三来日して指揮し、日本の音楽界発展に尽くした。NHK交響楽団名誉指揮者]

玉川学園は彼が帰国する二十一年までの間、新交響楽団(現N響)と二十九回にも及ぶ合唱付きの演奏に必ず出演し、ローゼンストックの指揮を受けました。ベートーヴェンの「第九交響曲」、「フィデリオ」、マーラーの「交響曲三番」等でしたが、圧倒的に「第九」の演奏が多く、合唱は必ず、玉川学園と現国立音大でステージに立ちました。また当時は男性で音楽を志す人が極めて少なく、男声は殆ど玉川の男子学生で女声は両校で半々位、合唱団の総勢は三百人位でした。学生に対しては優しく接し、ドイツ語の発音など懇切丁寧に何度も教え、自ら第九をピアノで弾き、その見事さにも圧倒されたものです。

オーケストラの指揮は厳しく、少しのミスも赦さない音楽作りの姿勢を示し、沢山の音の中から音程やリズムの違いを直ぐさま指摘し、その厳しい練習ぶりは第一

級のオーケストラ団員の心胆を寒からしめたそうです。団員の力を引き出し彼らも良く応え、めきめき上達して行くのが合唱練習で立ち会っていた私共にも伝わりました。オーケストラ演奏、そして合唱は、日本に於ける最初の欧州的な指導を直接うけた事になります。指揮姿の美しさなどが強く印象に残っています。ローゼンストックは帰国にあたり、「日本での音楽活動は生涯忘れる事がないでしょう。特に第九の度に出演してくれた国立音楽学校、玉川学園の学生諸君との思い出は尽きません。心を込めてサヨウナラと、別れのメッセージを残しています。彼が日本のオーケストラ界に尽くした功績は高く評価されています。

ワインガルトナー・フェリックス[(一八六三～一九四三)オーストリアの指揮者。ウィーン宮廷歌劇場指揮者。ベーゼル音楽院長などを経て三十五年ウィーン国立歌劇場総監督などを歴任。演奏は古典的な形式美を重んじた典雅なスタイルで知られる。またベートーヴェン解釈の権威として大きな影響を及ぼした。日本には昭和三十七年来日して新交響楽団を指揮した。ワインガルトナー賞を設け、早坂文雄、尾高尚忠らが授賞した]